

榎木館日和

しゅもくかんぴより ◆ 第四号



文化のみち榎木館

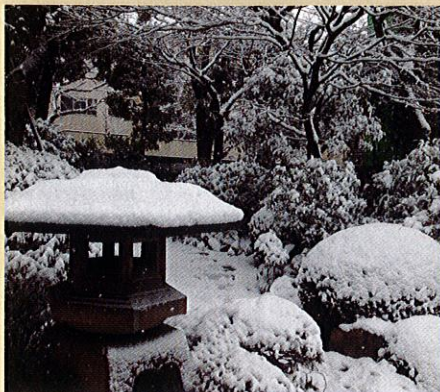
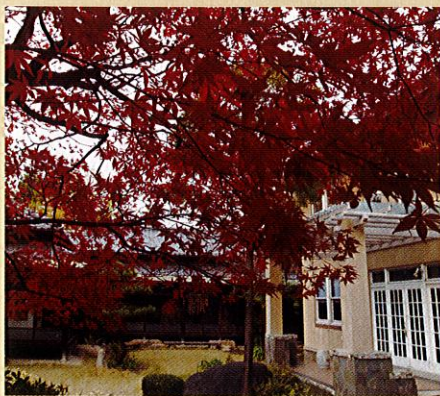
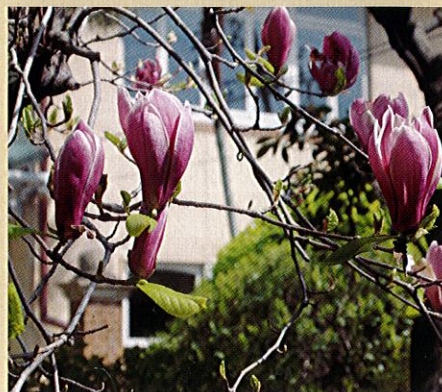
Cultural Path Shumokukan

発行日: 2011年 9月 19日

発行: 文化のみち榎木館

紫木蓮の甘い香りが庭を包んだ日、抜けるように
青い空、館の中を通り抜けていったあの風。
蝉の鳴き声がこたました夏の庭。鮮やかな紅葉が
庭を染めた日。館も庭もすっぱりと全てを包んだ
あの静寂。桜のつぼみが、こっそりと告げる、
新しい季節の到来。人が集い、語らい、歌う。
その毎日に、同じ日がなく、その毎日が、
榎木館びより。

毎日が 榎木館びより

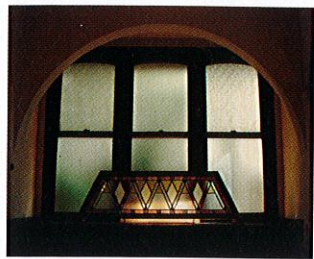


檜木館ステンドグラス今昔

新たなステンドグラスの発見

現在、文化のみち檜木館の洋館には14点のステンドグラスが飾られています。既に旧井元邸時代から2階遊戯室に嵌められていたチェス&ランプ意匠の3点を除き、平成19年10月8日に新たな11点が、東蔵2階で板に挟まれ紐で縛られた状態で発見されました。

当時、名古屋市から檜木館の暫定管理を請け負ったNPO法人檜木倶楽部(現指定管理者)理事と檜木館スタッフと兼任していた私は、戦前の貴重な美術工芸品であり建築当初に洋館を飾っていたであろうステンドグラスを、是非とも来館者に見て知って貰いたいと考えました。市の展示許可を得た後に、スタッフ総出で綺麗に埃を払い水洗い清掃して建具店で仮枠を逃え、10月下旬には11点の総てを洋館の1・2階に展示することが出来ました。



発見されたステンドグラスは、玄関扉上部に三角トラスを描く台形の1点、ホール扉飾り窓にギザギザが走る縦長の2点、ホール下がり壁に矩形で区切られたモンドリアン調の4点、トイレ入口上部に番いの青い鳥が銀杏の木に佇む半円アーチ形の1点、応接室テラス扉上部に番いの尾長鳥と植物を対称に配した3点でした。

その形状及び大きさから、かつて嵌められていた場所の特定が容易に出来たため、暫定公開期間終了後の平成20年7月31日から始まった耐震を含む館の補修期間には本来あった場所に戻されて古の姿に帰り、檜木

館が正式に市の施設として開館した平成21年7月17日より今日に至るまで来館者の眼を愉しませていきます。



ステンドグラスに想いを馳せて

発見されたステンドグラスの概要は、洋館2階サンルームに掲示されたステンドグラス研究の第一人者である田辺千代氏のパネル原稿を熟読して頂くとして、ここでは檜木館のステンドグラスに関する私自身の考えを幾つか述べてみようと思います。

それでは、何故ステンドグラスは本来あった場所から外され、保管されていたのでしょうか。高価なステンドグラスが破損しないため等の諸説はありますが、戦時中には物資統制による金属供出が要求されたことから、ステンドグラスを構成する鉛の供出を避けたということが一番の理由ではなかったかと考えます。

また、発見されたステンドグラスが当初飾られていた場所には、代用品として片面に細かな凹凸のあるガラスが嵌められていましたが、1階ホール東面の窓や2階サンルーム上部の窓等、可動域が少なく同様の凹凸ガラスが現在も嵌められている箇所には、ステンドグラスが飾

られていた可能性がかなり高いと思われます。事実、以前にステンドグラスが正面玄関右手のトイレ窓に嵌った古い写真を見た覚えがありますが、それが何の資料であったのか記憶に無いことが悔やまれてなりません。

檜木館のステンドグラス意匠である鳥&植物やチェス&ランプの具象モチーフは、アールヌーヴォーの流れを汲み、直線を基調とした幾何学模様はアールデコそのものです。マッキントッシュを想わせる番いの尾長鳥のシンメトリな図柄は、類似したものが存在しますが、幾何学装飾のアールデコデザインは中々に斬新です。アールデコは1925年パリ万博から世界に発信された最尖端のスタイルで、井元為三郎翁が翌々年の昭和2年に建てた自宅洋館のステンドグラスに早くも採用したという事実からも、翁が如何に新しい情報に敏感に反応し、且つ柔軟に受け入れた人物であったかを窺い知る事が出来ます。

檜木館を彩るステンドグラスの中でも、来館者には半円形の幸せを呼ぶ青い鳥に人氣が集中していますが、私個人としては簡潔な美を感じさせる玄関扉上部の台形欄間と、それに続く導線上のホール扉の縦長飾り窓が好みで、双方ともジグザグ模様を描くことで見事に呼応しています。玄関ポーチの天井に埋め込まれた青い星型照明を含む檜木館のステンドグラス群は、これからも末永く美しい光を映し投げ掛け続けてゆくことでしょう。



NPO法人檜木倶楽部理事

加美 秀樹

開館二年目を迎えて

文化のみち榎木館館長 吉沢徳貴

あの3月11日の大震災からまもなく5ヶ月を数え、名古屋も前年通りの酷暑の季節となりました。

今年も大型台風や歴史的大雨など「異常気象」の夏になりましたが、考えてみれば「前年通り」とか「前年並み」なんて言葉は、もはや存在しなくなっているのかもしれない。



今年の開館記念日である7月17日は「井元為三郎家の榎木館」という原点に帰って、陶磁器にまつわるイベントと講演会を開催致しました。一週間のパネル展示では、美濃焼の中で、現在から未来を、そして日本から世界を見据えて頑張っている「みずなみ焼」を牽引する人と企業の姿を紹介しました。また、講演会では、名古屋の街づくりや陶磁器産業に造詣の深い富山大学の古池嘉和教授に「陶磁器産地の連携と課題」をテーマに、今後のあるべき姿を語っていただきました。



「文化のみちの目標は、東区の界隈に住む人々が、瀬戸や美濃といった陶磁器産地と連携し、陶磁器文化に深い理解と関心を持ち「生活の芸術化」を実現させる成熟した界隈を目指すことです。そして、陶磁器会館等の文化的拠点のネットワークによる面的な文化の蓄積により、洒落た陶磁器屋さんがこの界隈に誕生してくれることを願います」と力説されました。

三年目に入った文化のみち榎木館は、前年の良い所は残しつつ、脱「前年通り」「脱「前年並み」をキーワードに、少しでも夢と元気を与えられる催しものと、ゆったりと心を癒せる空間づくりを目指していきたいと思っています。

酷暑の東区界隈にて

文化のみち界隈の近代建築を訪ねて

NPO法人榎木倶楽部理事長 中山正秋

徳川園の少し北に、日本福音ルーテル復活教会がある（1952年竣工）。この教会堂を建築したのは、W・M・ヴォーリスである。

ヴォーリスは、1905年に近江八幡の滋賀県立商業学校に英語教師としてアメリカから来日し、キリスト教の伝道活動を行い、学校教育や社会事業にも尽力するとともに建築家・実業家としても活躍した人物である。



建築家としては、ヴォーリス建築事務所を設立し、手がけた建築作品は日本全国に広がり、総数で1600件以上。また近江兄弟社を設立し、メンソレータム（現メンタム）の輸入販売を手がけたことでも知られている。



また、ヴォーリスは日本女性と結婚し、1941年には日本国籍を取得している。戦後、1954年に社会公共事業に対する功績により藍綬褒章を受賞。

1958年に近江八幡市名誉市民第1号となり、1961年には建築業界における功績で黄綬褒章を受賞している。

ヴォーリスの建築作品は、日本の気候風土や住習慣に適合させる工夫がなされ、実用性に重きを置きながら、簡潔ではあるが豊かなデザインと親しみやすく包容力のある空間を作り出している。近江八幡のヴォーリスの住まいは、現在ヴォーリス記念館として公開されている。質素ではあるが機能性に富んだ暖かい建物である。

日本福音ルーテル復活教会もこぢんまりして質素であるが、可愛く親しみやすい感じである。徳川園を訪れた時には、少し足を伸ばしてみると良い。

平成23年度催し物暦（3月～8月）

3/21～3/27

ぎふ地歌舞伎衣裳展
いのちさわぐ

5/18～5/22

◆真多呂人形展



3/30～4/3

春のテアトルコーディネート展

6/19

◆落語じゃなくって楽語の会



5/14

◆薫風茶会
爽・颯・蒼（そう・さう・そう）



文化のみち榎木館では、館主催イベントをはじめ、貸室利用を年間通しておこなっています。当館では和室・洋室・茶室・蔵・庭をお貸しします。詳しくは下記の電話番号、ファックス番号へお問い合わせいただくかホームページをご覧ください。